

アーカイブで辿るLGBTQ+の歴史

井谷 聡子

すごいアーカイブが関大にやってきた

関西大学の図書館のコレクションにセクシュアリティとジェンダーのアーカイブ (*Archives of Sexuality and Gender*) のパートIとIIが加わることになった。タイトルの通り、これらはセクシュアリティとジェンダーに関する歴史資料の電子コレクションシリーズで、全部で5つのパートから成る。日本では、第I部と第II部が先行してリリースされることになり、早々に関大図書館にも導入されることになった。5つのパートは、それぞれ以下のようなタイトルが付いている。

- ①1940年以降のLGBTQの歴史と文化 第I部
- ②1940年以降のLGBTQの歴史と文化 第II部
- ③16~20世紀の性とセクシュアリティ
- ④LGBTQアクティビズムと文化に関する国際的視点
- ⑤フランス国立図書館「地獄」コレクション

これらのアーカイブ資料が関大に入ると決まった時、ジェンダーとセクシュアリティ研究に携わる者として心躍る思いがした。これらの資料の中心は、欧米の英語圏におけるものであるが、フェミニズム運動も含め、LGBTQ+の歴史や、性をめぐる社会規範がどのように変化してきたのか、厳しい差別に晒されてきた人々がどのように自分たちのコミュニティを作り、また差別解消と人権と命を守るために社会や政府に働きかけてきたのかなど、国や地域をまたぐ重要な研究課題に向き合う上で、大変貴重な資料だ。

また社会運動のあり方だけでなく、「LGBT」や「性的マイノリティ」と大きく一括りにして語られが

ちだけれども、実際には民族もジェンダーも、宗教や心身の状況、社会経済状況、そして文化も多様な人々が、インターネット以前の社会でどのようにお互いを見つけ、繋がり、支えあい、また時には複雑に対立し合いながら生活し、コミュニティを作ってきたのか、人々の日常とその歴史を知る上でも、このアーカイブはたくさんの情報をもたらしてくれる。

デジタル・コレクションの重要性

公的な記録に現れる歴史や、著名人の暮らしぶりや言葉は様々な形で豊富な歴史的資料として残されており、多くの研究者たちが携わって記録を残してきた。しかし、女性やLGBTQ+など、社会で周縁化されてきた人々は、公的な資料に記録されることがほとんどなく、そうした資料を中心に進められてきた「伝統的」な歴史研究の中では、その存在が表に現れることはほとんどなかった。それは、政府や歴史研究が長く男性中心であったこと、そして男性の中でもその社会で支配的な民族出身で、異性愛者、シスジェンダー（トランスジェンダーではない人）で重い障害のない、中流階級以上の人々が歴史研究者となり、本を書いてきたことによる。

このように、社会を構成する多様な人々のうち、ごく一部の人の歴史が、その国や社会の歴史を代表してきてしまったことで、そこには大きな偏りが存在してきた。英語で歴史を意味する“history”という言葉も、“his-story”、つまり「男たちの物語」である。そうした特定の男性を中心とした歴史は、フェミニズム運動を契機としたジェンダー研究の盛り上がりの中で反省されるようになった。特に1980年代以降、“herstory”とも表現される女性史に始まり、ジェンダー史へと研究の枠組みが発展する中で、特

に2000年代からはLGBTQ+の歴史についても研究が大きく前進するようになった。

こうして、ここ数十年の間にジェンダーとセクシュアリティの歴史に関する新たな資料が次々に発見され、収集されてきたが、それらの多くは地域の活動家が個人で収集したものであったり、小さなコミュニティ・センターが細々と守ってきたアーカイブの中にあたりして、容易にアクセスすることができなかった。特に私のようにアメリカ合衆国やカナダにおけるLGBTQ+の人々の運動やコミュニティにおける活動について関心を持っている研究者は、短い休みの間にその国に飛び、コミュニティとの関係を作りながらアーカイブの在処を突き止めたり、関係者にインタビューをしたりしながら記録を作る必要があるため、資料探しと情報収集には膨大な時間とお金がかかる。今回導入されたアーカイブは、そうした作業の多くを日本にしながら進めることを可能にしてくれるだけでなく、すでに資料が整理され、デジタル化されているおかげでキーワード検索ができ、関心のあるテーマに関する資料と思う存分に向き合うことができる。

とても現実的な話をすると、海外ではこうした貴重なアーカイブ資料のデジタル化がどんどん進められている一方で、資料の整理と管理、デジタル化には当然膨大なお金がかかるため、アーカイブへのアクセスが有料であることが多い。今回取り上げた「セクシュアリティとジェンダーのアーカイブ」も、人文系の研究者が個人で獲得できる研究費ではなかなか手が出ない高額な資料である。そのような資料が大学の図書館に導入されたことで、専任教員だけではなく、大学院生や学部生もアクセスできる貴重な一次資料となった。特に院生や学部生が海外のアーカイブに度々足を運ぶための資金を獲得することは難しいため、海外のLGBTQ+の歴史やフェミニズム運動に関心があっても、それを研究テーマにすることが難しい。その意味においても、このコレクションが本学に加わったことで、この研究領域を牽引する若い研究者の成長に大いに貢献してくれるに違いない。

次の項では、コレクションの紹介文を抜粋しながら、より具体的な内容を紹介したい。もちろん、全

ての資料に目を通してはいるわけではないので、ここで言及することができないテーマや貴重な資料が多く隠されていることだろう。それらを日本にいなから検討し、発見することができるのも、デジタル・アーカイブの大きな強みだ。

「1940年以降のLGBTQの歴史と文化」

コレクション第I、II部には、大型の国際的な活動団体から、地元で活動する草の根団体まで、数百の機関や組織から収集された資料が収められている。第I部では、1940年以降のLGBTQ+の歴史と文化の重要な側面を示す資料が含まれている。より具体的には、1940年から2014年までに作成された資料が含まれており、その多くが1950年から1990年の間にアメリカ合衆国とイギリスで作成されたものである。

例えば、記録に残る中では欧米圏で初めて作られたゲイ男性のための運動団体である Mattachine Society や、その直後に設立されたレズビアン女性の団体である Daughters of Bilitis、イギリスで同性愛者の非犯罪化を目指して活動した Albany Trust など、ゲイ・レズビアンの人権運動の中で重要な役割を果たした政治的・社会的組織の記録や出版物が含まれる。

また、特に1980年以降の資料には、LGBTQ+コミュニティが、ウイルスだけでなく差別と偏見との闘いを強いられたHIV/AIDS危機をめぐるものが多く含まれる。レーガン政権やそれを引き継いだブッシュ政権によるエイズ危機への対応をめぐる資料や、当事者と支援者らによる直接行動をその活動の中心とし、クィア・アクティビズムの大きな流れを作ったACT UPの活動に関する詳細な記録も大変貴重なものである。

これらの記録からは、人間が新たなウイルスの脅威に直面した時、マイノリティの命と暮らしが政府やマジョリティ社会からどのように扱われるのか、誰の命が優先され、誰の命は失われてもいいものとして扱われるのかという、新型コロナウイルスのパンデミックに翻弄される今日の私たちにも突きつけられる問いと、その歴史的に繰り返されてきた課題が浮かび上がる。

また、欧米諸国だけでなく、35カ国以上のゲイ&

レズビアンやゲイの団体やグループが発行した新聞、エイズの世界的影響を含むゲイの権利と健康に関する報告書、政策や声明、その他の文書がアーカイブに含まれている。

そうした比較的歴史の表舞台に残りやすい大型組織の記録だけでなく、そのコミュニティを構成する多様な人種、民族、年齢、宗教、政治的志向、地理的位置など、立場の異なる個人の経験を垣間見ることのできる資料も含まれている。レズビアンやゲイ男性らによるコミュニティ向けの手作りのニュースレターや新聞、定期刊行物や、個人的な手紙やインタビューが含まれている。例えば、Gay, Lesbian, Bisexual, Transgender Historical Societyの資料には、スピリチュアリティを志向するグループであるQ Spirit フォーラムやSouthern California Council on Religion and the Homophileといった、現在は消滅しているグループの出版物のものもある。また、Lesbian Herstory Archivesのコレクションには、1970年から2008年までの主流とオルタナティブな出版物が含まれている。

また、レズビアン関連のアーカイブとしては世界最大の資料集を誇るLesbian Herstory ArchivesやGay, Lesbian, Bisexual, Transgender Historical Society、Canadian Lesbian and Gay Archivesなどのコレクションには、アメリカ合衆国とイギリスといった英語圏以外にも、ドイツ語、ポーランド語、スペイン語、ロシア語、日本語、フランス語、イタリア語、ヘブライ語、インドネシア語などの資料が含まれる。ラトビアやジンバブエなど、非欧米諸国の定期刊行物やニュースレターもあるが、残念ながらこうした非欧米・非英語圏の資料は限定的で、これからの発展が望まれる領域である。

こうした多様な国や地域、コミュニティから集められたこれらのコレクションは、コミュニティの形成と育成、地域・国内・国際ニュースの提供、会議・デモ・その他のイベントの広告、娯楽の話題や、LGBTQフレンドリーなビジネスの紹介など、インターネット到来以前の世界における印刷メディアが、場所は異なっても世界各地のLGBTQの人々にとって多くの機能を持ち、コミュニティの維持や、コミュニティをベースにしたケアの実践に貢献してきた

ことを明らかにしてくれる。

フェミニズム運動に関わる資料も豊富である。例えば、「Phyllis Lyon and Del Martin: Beyond the Daughters of Bilitis」コレクションには、リオンとマーティンによる家庭内暴力に関する本や、全米女性組織（NOW）との活動に関連する文書が含まれている。Lesbian Herstory Archivesのファイルの多くは女性解放運動に関するもので、Sexual Politics in Britain コレクションは、特にイギリスにおける女性解放運動の記録である。

日本のジェンダー研究でも、近年急速に「インターセクショナリティ」という言葉の認知が広がり、ジェンダー問題というシングルイシューだけでは見えてこない複雑で重層的な差別の構造に対する注目が高まっている。人種や民族、セクシュアリティ、障害など、複雑に絡まり合う支配・差別構造に対して、マイノリティ化された女性たち、例えばレズビアン女性やトランス女性らがどのように問題意識を言語化し、主流のフェミニズム運動に対して異議申し立てをし、時にはオルタナティブな運動の場づくりをしてきたのかについて、このアーカイブの資料が重要な示唆を与えてくれるだろう。

関大図書館はジェンダーとセクシュアリティの歴史を研究する資料の宝庫

今回は、「セクシュアリティとジェンダーのアーカイブ」を紹介したが、関大図書館にはそれ以外にもジェンダーとセクシュアリティの研究を行う上で重要な資料が多く所蔵されている。近年社会的にも注目が集まっているトランスジェンダーに対する差別と人権擁護のための運動に関する様々な著作が、日本語だけでなく、英語のものも含め徐々に集められている。例えば、Routledgeから出されている『Transgender Studies Reader』の第1巻と第2巻、『The Sage Encyclopedia of Trans Studies』の第1巻と第2巻も収蔵されており、トランスジェンダー研究の歴史と現在を学ぶ上で重要な資料が揃っている。まだ日本にはトランスジェンダー研究を名前に冠した学会や研究誌はないものの、この領域は現在若手研究者による蓄積が目覚ましく、関大のこうした資料を活用して日本を牽引する研究者が育つのも

時間の問題のように思われる。

最後に、図書館予算が厳しいことを承知した上であえて贅沢な願いを書くとするなら、関大図書館には、『GLQ: a journal of lesbian and gay studies』や『TSQ: Transgender Studies Quarterly』など、世界を代表するクィア、トランスジェンダー研究のジャーナルの定期購読を期待したい。日本でもまだ数少ないセクシュアリティ研究を専門とする研究者が、専任と非常勤研究者を合わせると関大には複数在籍している。これは、研究者も学生数も多い大規

模校だからこそ可能になったと言えるだろう。これから更なる発展が見込まれ、社会的にも重要な役割が期待されているセクシュアリティ研究の現在を合わせて考えると、こうした資料が本学で積極的に収集されることには重要な意義がある。これらの貴重なコレクションと研究者のネットワークを通して、本学がジェンダーとセクシュアリティ研究の中心地として発展し、社会に重要な貢献をしていくことを願ってやまない。

(いたに さとこ 文学部 准教授)